

There 構文の諸相と言語材料としての 中学校英語教育における展開

小 山 久美子*

Aspects of *There* Constructions in English and Teaching Them at Junior High Schools

Kumiko KOYAMA

Abstract

There constructions are called existentials which denote the existence of something. It seems easy to master them, but even some university students do not understand their syntactic, semantic, or pragmatic features, and make wrong translations. One of the reasons they misunderstand *there* constructions might be that they did not master them at junior high schools. This paper reviews the characteristics of *there* constructions, and then examines how the textbooks used at junior high schools present the constructions, and investigates the cause of some students' misunderstanding the constructions.

キーワード：there 構文, 言語材料, 文法事項, 文構造, 中学校英語教育

1. 序

いわゆる「存在文」と言われる *there* 構文は、中学校および高等学校を通して6年間も言語材料（文法事項）として教科書や参考書、問題集に掲載され、学習されている。しかし、大学の授業においても、この構文を誤って解釈している学生が多々見受けられる。このことから、*there* 構文を初めて学習する中学校での理解が十分でなかったのではないかといわざるを得ない。もちろん、決して中学校での教育が不十分であるといっているのではない。だが、単にこ

*教授 言語学・英語教育

の構文を忘れていたとは言えない大学生の状況が現実にある。

形式的に *it* を主語の位置に据える *it* 構文と *there* 構文は、どちらも主語の位置に形式上の主語として *it* や *there* が置かれている文構造なので、同じように誤った解釈をしていると思われる。だが、*there* 構文と *it* 構文とは異なる特徴を有しており、単純に形式主語を持つ同様の構文とはいえない。It 構文は形式主語をもつ構文として比較的難なく理解され得る傾向があるのに対して、同じように形式的に *there* が文頭にある *there* 構文が誤って記憶されてしまうのはどこに原因があるのだろうか。この文構造が複雑すぎるのであろうか。それとも、文法事項として導入される中学生にとって難しすぎるのであろうか。

本稿では *there* 構文について、その諸特徴をみながら中学校英語教育における *there* 構文の扱い、文法指導について検討する。まず、*there* 構文の統語的な特徴、意味的機能的特徴等の諸相を述べ、2つの中学校の検定教科書を資料として用い、言語材料（文法事項）としてのこの文構造の扱いについて検討していく。

2. There 構文の特徴

2.1 統語的特徴

英語の文には、例外はあるが、主語と動詞が不可欠である。一般的に主語が文頭の位置を占め、その後に動詞が続く¹。

- (1) a. Your key was on the table in the kitchen.
- b. *Was on the table in the kitchen.

英語で何かが存在することを表す表現には、(1a) (2a) のように主語と *be* 動詞からなる構造の他に、(2b) で示すように *there* を用いた文構造をとるものがある。

- (2) a. A pen is on the table.
- b. There is a pen on the table.

(2b) の文頭にある *there* は文法上の主語の位置にあるが、この *there* をめぐっては、その呼び名が様々ある。古くは Jespersen (1933) が「予備の *there*」(*preparatory there*) と記し、Zandvoort (1980[1962]) が「前置の／導入の *there*」(*introductory there*) と呼んだ。Celce-

Murcia & Larsen-Freeman (1999) は「特定のものを指し示さない *there*」(nonreferential *there*), Curme (1978[1931]) および Biber et al. (1999) は「先行の *there*」(anticipatory *there*) と呼ぶ。Huddleston & Pullum (2002) は、単に主語の位置を占める文法構造のマーカでダミーの代名詞 (dummy pronoun) と呼び、歴史的には場所を表す *there* から派生し、場所の意味が消えて代名詞として再分析されたと述べている。

また、存在の主体は、動詞の後に生じる。Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999) は動詞の後の名詞句は目的語ではなく主語であるとし、「論理的な主語」(logical subject) と呼び、文法上の主語 (grammatical subject) と区別している。Biber et al. (1999) は「概念主語」(notional subject) という用語を用い、Huddleston & Pullum (2002) は「移動された主語」(displaced subject) と呼ぶ。呼び名は様々であるが、*there*² が通常の主語の位置に生じ、その後に動詞、さらに本来の主語がくる構造が *there* 構文である。本稿では、動詞の前に位置する *there* を「文法上の主語」、動詞の後の名詞句を「意味上の主語」と呼ぶことにする。

文法上の主語が *there* であることは、(3) のように付加疑問文を作れることから証明されている。

(3) *There is something wrong, isn't there?*

統合上の他の特徴は、動詞が *there* に呼応するのではなく、動詞の後に生じる名詞句、すなわち意味上の主語の数に呼応する点である。

- (4) a. *There is a book on the table.*
b. *There are two books on the table.*

(4a) の意味上の主語は *a book* と単数であるので動詞が *is* となるが、(4b) は *two books* が意味上の主語なので、動詞は *are* となっている。これは形式主語に *it* を取る構文と異なる点である。It 構文では、常に文法上の主語である *it* に呼応して動詞は単数形になる。しかし、*there* 構文では、文法上の主語である *there* には呼応せず、意味上の主語の数に呼応する。

ところが、実際の会話等ではこのような呼応をせずに、意味上の主語が複数であっても *there's* となることがあるという。この点については後述する。

さらに、*there* 構文の形態によっていくつかのパターンが見られる。Huddleston & Pullum (2002) は、*there + be* 動詞 + 意味上の主語のみの *bare existentials* とそこに拡充／敷衍

(extension) が加わる extended existentials の 2 種類に分けている。

- (5) a. There are good teachers and bad teachers.
b. There is plenty of ice-cream.
- (6) a. There's one copy on the table.
b. There were two delegates absent.
c. There are still a few replies to come.
d. There were some letters written by her grandmother in the safe.
e. There was one man that kept interrupting.

(5) は意味上の主語についての補足部や場所や時間の副詞句等がない。(6a) には on the table という場所の副詞句, (6b) には意味上の主語を修飾する叙述的拡充 (predicative extension)³ が, (6c) (6d) (6e) にはそれぞれ不定詞, 分詞, 関係詞節がある。このように there 構文にもいくつかのパターンがある。

There 構文に生じる動詞は主として be 動詞であるが, それ以外の自動詞も生じる。(7) に挙げたように, be 動詞同様, 存在を示す動詞や出来事, 出現を表す動詞, 動き・方向を表す動詞である⁴。

- (7) exist, live, stand, lie remain, arise, appear, emerge, happen, come, go, etc.

次に, 意味上の主語についてみていく。There 構文に生じる意味上の主語は, 主として, 不定 (indefinite) なものである。典型的な例である (2b) (4a) のように, 不定冠詞付きの名詞句や (4b) のような複数形になることが多い。すなわち, 定冠詞付きの名詞句や固有名詞はこの構文には生じないとされている。しかし, (9B) のように意味上の主語に定冠詞付きの名詞句をとる文も見受けられる。

- (8) A: What's in that drawer?
B: *There's the stapler.
- (9) A: What's in that drawer?
B: There's the stapler, but nothing else.

(8) では定名詞句が非文となるが、(9) では同じ定名詞句が容認可能となる。この点については、意味的特徴、語用論的特徴とも関係するので、後に詳しく述べる。

2.2 意味論的特徴, 語用論的特徴

Huddleston & Pullum (2002) は、主語に *there*、動詞に *be* を持つ構造は存在に関する命題を表す節 (existential clauses) と呼ばれると述べている。文法上の主語である *there* には場所の意味はなく、そのことは、副詞の *here* と共起できることからいえる。

(10) *There is nothing here.*

There に場所の意味が残っているとすると、(10) は矛盾していることになり、非文となるはずである。したがって、上記のような構文における *there* は場所ではなく、別の機能を持つと考えられる。

Bolinger (1977) によると、*there* は何かを心理的に気付かせるよう導くはたらきをしているという。

- (11) a. *Across the street is a grocery.*
b. *Across the street there's a grocery.*

(11a) は、目の前に出現したものを生き生きと描写している提示的な構造であるのに対し、*there* を用いた (11b) は何か、知識の断片を意識に持ち込むはたらきをしている。それゆえ、(11b, e) のように情報として提示する場合は容認可能となる。他方、(11c) はまさに眼前に現れたものを描写している。

- (12) a. **As I recall, across the street is a grocery.*
b. *As I recall, across the street there's a grocery.*
c. *As you can see, across the street is a grocery.*
d. **I can see that across the street is a grocery.*
e. *I can see that across the street there's a grocery.*

Langacker (1991) も、*there* 節の基本的な機能は提示であるという見解を示した。すなわち、

there 節はある要素を聞き手の意識へ持ち込み、there は聞き手の注意を新情報の項目へ向けさせる信号としての役割を果たしているという。

Huddleston & Pullum (2002) は、there 構文と there を用いない文との違いは情報のまとめ (information packaging) であると主張している。すなわち、there 構文は聞き手にとって新しい情報を談話に導入するために用いられるという。Biber et al. (1999) も、この構文は新情報を導入するもので、there の機能は聞き手を動詞の後にくるものに集中させることであると述べている。聞き手にとっての新情報を導入するので、意味上の主語は一般的には不定 (indefinite) である。したがって、不定冠詞付きの名詞句が意味上の主語として容認されることが多い。

だが、先述したように意味上の主語が定 (definite) である場合もある。Huddleston & Pullum (2002) は、定名詞句でも聞き手にとって新情報であれば there 構文の意味上の主語になれると述べている。さらに、そのような場合について分類している。例えば、(13a) のように聞き手にとって既知のものを新しいものとして思い出させる場合、また、既知の項目の中から新しい例を取り出す場合 ((13b)), 既知の名詞句が新情報を例示する役目をしている場合 ((13c) (13d)), 等である。

- (13) a. A: I can't imagine what I'm going to make for dinner tonight.
B: Well, there's that leftover meatloaf.
- b. Physics majors are required to take three courses in a foreign language, and there is the same requirement placed on students in the other sciences.
- c. A: What can I get Mary for her birthday?
B: There's the new book on birdwatching we were talking about yesterday.
- d. A: Who was at the party last night?
B: There was Mary, Sue, Fred, Matt, and Sam.

特に、(13d) は Rando & Napoli (1978) がリスト文と呼んだものである。聞き手は Mary たちのことを知っているが、どの人が出席したかについては知らないで、ここに述べられている固有名詞のリストは新情報となる。

Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999) は、there 構文は談話内に新しい指示物を導入したり、意味上の主語とその場所を導入したり、存在を主張したり、リスト示したり、あるものの存在を思い出させたり、シーンを描写したりする等のはたらきをすると述べている。

There 構文の諸相と言語材料としての中学校英語教育における展開

以上のことから、there 構文の機能は、あるものの存在を新情報として聞き手に認識させることであるといえる。既知の事柄でも思い出させることによって、認識を新たにさせることになるので、新情報といえる。その新情報は談話内でトピックとなり得るものである。存在を示すことによって、それが情報として聞き手に新たに認識されることが重要なのである。

3. 中学校英語教育における言語材料としての there 構文の展開

ここでは、『Sunshine』（開隆堂）と『New Horizon』（東京書籍）の2つの文部科学省検定教科書を資料として用い、there 構文の中学校英語教育における取扱いを検証し、there 構文を誤解する要因について考察していく。

言語材料として there 構文が中学校英語の授業で取り扱われるのは、第2学年である。『Sunshine 2』では Program 5 で、『New Horizon 2』では Unit 6 で、there 構文が文法事項として初出する⁵。指導用書には、前者は9月、後者は11月に学習する目安が記されている。これらの単元の題材は、それぞれ「ガリバー旅行記」と「落語」である。どちらにおいても、もの・事柄の存在を表したり、尋ねたりできることが到達目標である。すなわち、存在を表す表現としての there 構文を学習することになっている。

ところで、単語の there が初めて学習されるのは第2学年ではない。第1学年で場所を表す副詞として『Sunshine 1』では Program 6 で、『New Horizon 1』でも Unit 6 で学習される。教授用書には、両教科書とも9月、2学期に学習する予定が記されている。両課の題材は、それぞれ「イギリス旅行」と「オーストラリアの兄」で、どちらも海外を扱い、場所としての副詞として there を学習する。

大学生によく見られる there 構文に関する間違いは、there 構文の文頭（主語位置）の there を場所を表す副詞「そこへ、そこで」あるいは名詞「そこ」と訳すことである。この原因の一つとして考えられるのは、中学校第1学年で there は場所を表す意味であると学習することである。そのため、第2学年の2学期（9月、11月）に、there 構文を学習するときには、すでに there イコール場所と刷り込まれており、先述のような間違いをするのではないかと考えられる。すなわち、there 構文と場所を表す there の教科書内の頻度（量的）差が誤解の要因の一つと考えられる。そこで、下記のような仮説をたててみる。

- (14) 場所を表す there の頻度（量）が存在を表す there 構文を上回るため、there 構文の理解が不十分になる。

場所を表す *there* が視覚でインプットされることが影響すると考えられるため、仮説 (14) の検証として、場所としての *there* および存在文としての *there* が資料中に出てくる頻度を調べてみる。資料中に単語として表記されている箇所を対象にした頻度が表 1 および表 2 である⁶。注目すべきは、『Sunshine 2』 Program 6 で、「場所」としての *there* が併記されており、存在文としての *there* 構文の *there* とは別であることを学習できる点である。すなわち、*there* 構文における *there* は「場所」と区別すべきであることを認識し、習得することができるようになってきている。

表 1 および表 2 を見ると、3 学年を通して全体としては、教科書で *there* が場所を表す副詞や名詞として明記されている箇所は、存在を表す *there* 構文として明記されている箇所より少ない⁷。上記の数に、CD の音声による件数や教師の説明文として記されている数、練習問題の答えとして生徒が話すであろう件数を加えても、存在文として接する量の方が多いことは否定できない。しかし、第 1 学年、および第 2 学年で *there* 構文を学習する Program 5 や Unit 6 の前に、ある程度、場所として *there* が用いられているため、*there* イコール「場所」としての学習が定着していると考えられる。そのため、存在文としての *there* 構文を学習する際に「場所」の意味が消えないのではないだろうか。

ところで、*there* と同じく「場所」を表す *here* の出現数は *there* と比べて多くない。但し、*here* に関しては“Here you are.”あるいは“Here’s your change.”という表現も学習される。“Here’s ~.”の表現に関しては、*there* 構文の *there* と異なり、「場所」の意味が残る。したがって、場所としての *here* と *Here’s ~* の文構造に隔たりがなく、「ここに」と解釈しても差し支

表 1 『Sunshine』における「場所」および「存在文」としての *there* の出現数

	1 年	2 年			3 年	合計
		pp. 2-43	Program 5	pp. 50-131		
場 所	17	17	4	13	23	74
存 在	6	2	18	32	28	86

表 2 『New Horizon』における「場所」および「存在文」としての *there* の出現数

	1 年	2 年			3 年	合計
		pp. 2-79	Unit 6	pp. 90-151		
場 所	13	14	0	5	24	56
存 在	0	4	37	17	38	96

えないといえる。しかし、there 構文の場合は、「そこに」という場所の解釈はあり得ないので、中学生が混乱する一因になると考えられる。このように、量的調査では、全体としては、場所を表す副詞としての there の存在が there 構文に明らかに影響しているという仮説は実証されなかった。

There 構文の there を「場所」と訳してしまう他の原因として考えられるのは、英語の文構造にあるのではないだろうか。例文 (16) を見てみよう。

- (15) a. Dolphins sometimes jump very high. (『Sunshine 1』)
- b. That's the Sherlock Museum. (『Sunshine 1』)
- c. You're a great cook. (『New Horizon 1』)
- d. Her English is very good. (『New Horizon 1』)

(15a) は主語である “Dolphins”，つまり「イルカ」についての文で、主語の “Dolphins” は内容語と解釈される。それに対し、(15b) (15c) の主語は代名詞で、「あれは」「あなたは」と訳されることが多い。中学校英語では、和訳中心の授業を展開しているわけではない。しかし、主語を訳さなければならないという考えに陥る傾向があるのではないだろうか。すなわち、主語が内容語であれ形式主語であれ、理解する上で主語に訳をつけてしまい、場所としての there の意味をそのまま用いてしまうことが there 構文の誤った解釈を引き起こすのではないかと考えられる。

さらに、there 構文同様に文法上の主語を形式的に置く it 構文の文構造と比較してみる。

- (16) a. There is a book on the table.
- b. It is difficult to master French.

(16b) の文法上の主語の it は to 不定詞を受ける形式上の主語である。すなわち、it イコール to master French である。一方、(16a) は文法上の主語である there は受けるものがない。意味上の主語である a book を受けて、there イコール a book であるとは言えない。学習の順序は、there 構文の方が it 構文より先であるが、全ての形式主語が何かを受ける、すなわち、主語は意味を持つものであると思ひ込み、there 構文の不十分な理解に至るのではないかと考えられる。

さて、2.1 でみたように、there 構文には bare existentials と extended existentials のように

2種類ある。前者は、場所の副詞、時の副詞等がなく、後者は意味上の主語の修飾する要素や場所・時の副詞句等がある。存在を表す場合、どこにあるのかという場所を表す句がついている構造が無標といえる。ということは、場所や時を表す副詞句が *there* 構文に付随している文構造を中学校英語で徹底するべきである。だが実際には、(18) のように *bare existentials* が明記されている。

(17) a. In war there are no winners. There are only losers.

(『Sunshine 2』 Extensive Reading p. 119)

b. How many students are there in your class? There are thirty-two.

(『Sunshine 2』 p. 124)

c. The robots working for us are amazing. But there's also a big problem.

(『New Horizon 3』 Unit 5 p. 74)

(17a) (17b) とともに巻末資料ではあるが、*bare existentials* の文構造である。ただ、場所を表す句はその前の文に明記されているため、繰り返しを避ける英語の性質により、場所が省略されたといえる。(17c) は Unit 5 で第3学年の10月に学習する配置になっている。いずれの例でも、場所は文脈からわかるので、*bare existentials* が用いられていても不自然にはならないが、中学校英語教育においては無標の形式である場所等の副詞句を付した文構造を優先すべきではないであろうか。

ところで、先述したとおり、実際のコミュニケーションにおける *there* 構文では、動詞が意味上の主語とは呼応せず、単数形のままのことがよくある。Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999) によると、インフォーマルな会話では *there's* が優勢になると述べている。

(18) There's problems here.

(19) a. There are two boys and a girl in the room.

b. There is a girl and two boys in the room.

c. ?There are a girl and two boys in the room.

文法書では (19a) のように複数の意味上の主語を取る場合は、*be* 動詞は複数形にすることが書かれている。しかし、実際の口語体では、(18) (19b) のように複数主語であっても単数形の動詞が用いられている。さらに、(19c) のように意味上の主語 (*a girl and two boys*) として

a girl が先に来る場合は、two boys があっても動詞は単数形になっている。このような文が用いられるのは、Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999) によると、it 構文からの類推よると考えられるという。また、Breivik (1981) によると、there と is が1つの形になってしまっているからであるという。実際、英語のネイティブ・スピーカーの多くは、文法書にあるような数の呼応を無視して、複数の意味上の主語に対しても there's の形を用いているという。これは興味深い点である。ネイティブ・スピーカーであっても there's を発話しているのであれば、ノンネイティブ・スピーカーがこのような形を用いても問題ないように思える。但し、これはあくまでもインフォーマルな場合に限るわけで、教育を受けた人の話し方ではないといえる。したがって、口語体であっても文語体であっても意味上の主語と動詞の数を呼応させることが望ましい。

これまでみてきたように、文法上の主語である there そのものに意味がなく、何か後置の名詞句を受けるわけではない there 構文は特殊であるといえる。そのような文構造について、指導する際は、この構文の役割を刷り込むことが重要になると思われる。すなわち、2.2 で述べたように、新しい情報として何かの存在を伝える機能を有する文構造であることを明確にしなければならない。ところが、教科書等においても、「存在を表すこと」の方が強調されており、新情報として談話に導入するはたらきをしていることは述べられていない。学習指導要領には、文法はコミュニケーションを支えるものであることを踏まえることが明記されており、there 構文が新情報を談話に導入するはたらきをしていることを教えることは自然であると思われる。しかし、中学生にとって、文構造を覚えるだけでも負担が大きいため、機能の方に注目することは難しいのかもしれない。今後の課題である。

4. 結語

中学校英語で言語材料（文法事項）として初めて学習する there 構文は、統語的にみても、意味的・機能的にみても他の文構造とは異なる特徴を有している。文頭の主語の位置にある there には「場所」の意味はなく、動詞の数はその後にくる意味上の主語と呼応する。同じく形式主語をもつ it 構文とは異なる。さらに、形式主語であっても it とは異なり、後置の名詞句を受けるわけではない。また、場所や時間の副詞句等を伴う形式とそれがない形式がある。いずれの形式でも、there 構文は、もの・事柄の存在をトピックとなり得る新情報として聞き手に認識させる機能を有する。

上記の特徴を有する there 構文の理解が不十分になる要因として、「場所」の副詞としての

there の定着が考えられるため、量的調査を行った。その結果、中学校第1学年から第3学年までを通して表記されている量は、存在文の方が多かった。しかし、there 構文を学習する前に「場所」としての学習が定着していると考えられること、また、同じく場所を表す here と Here's ~ 構文と同様に、there 構文の文法的主語の there に「場所」の意味を付してしまうと考えられる。このことは、英語の文がでてくると主語を訳してしまう傾向がみられることも影響していると考えられる。実際の日本語の会話では、主語が省略されることは多々ある。There 構文でも文法上の主語を訳さず、一つの新情報を導入するマーカーのようなものと考えれば、間違った解釈が軽減されるのではないだろうか。

さらに、実際のコミュニケーションでは、統語的に意味上の主語に呼応せず、動詞を単数形にしてしまうことがあることも見てきた。だが、これは正式な形ではないので、中学校英語教育においては、まず、基本形として、正確な統語構造を学習すべきであると筆者は考える。

今後は、there 構文の理解を徹底するために、there 構文の新情報としての機能に目を向ける指導や教材研究について考察していきたい。

注

1. いわゆる倒置文は、主語が動詞よりも後にくる。
 - i. In a little wooden house in the middle of a deep forest lived a solitary woman who spent her days reading and gardening. (Huddleston & Pullum, 2002)
2. 文法上の主語としての there の発音は弱形 /ð ə r / で、強勢がない。
3. Huddleston & Pullum(2002) は、there 構文の意味上の主語の叙事的拡張は永久性のない、現在の状況を示す、一時的なものでなければならぬと述べている。
 - i. *There were two delegates deaf.
4. これらの動詞をもつ there 構文を be 動詞をもつ there 構文（存在文）と区別して提示文と呼ぶことがある。
5. 第1学年で学習する『Sunshine 1』の巻末の *Please Mr. Postman* の歌詞中、および巻末資料に there 構文がでてくるが、文法事項としては学習していない。第2学年で学習する『Sunshine 2』の Program 5 および『New Horizon 2』の Unit 6 以前に出てくる存在文は目次である。
6. 表1の2年生の p. 43 は Program 5 の前のページであり、pp. 50-131 は Program 5 の次から最後までで、Program ではないところなので、ページ数による表記にした。表2も同様。
7. 表1において、第1学年に存在文が6つ出てきたのは、注5でも記したように、歌の中および巻末資料に出たものである。表1の第2学年の Program 5 および表2の第2学年の Unit 6 以前の存在文も目次である。

参考文献

- Abbott, B. 1997. "Definiteness and existentials." *Language* 73: 103-108.
- Biber, D. et al. (eds.). 1999. *Grammar of Spoken and Written English*. Longman.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. Longman.
- Breivik, L. E. 1981. "On the interpretation of existential *there*." *Language* 57: 1-25.
- Celce-Murcia, M. and D. Larsen-Freeman. 1999. *The Grammar Book*. Heinle and Heinle Publishing.
- Curme, G. O. 1978[1931]. *Syntax*. [D. C. Heath and Company] Maruzen Co.
- Huddleston, R. and G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- JACET 教育問題研究会編, 2012. 『新しい時代の英語科教育の基礎と実践』. 三修社.
- Jespersen, O. 1933. *Essentials of English Grammar*. George Allen & Unwin.
- Langacker, R. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*. Stanford University Press.
- 文部科学省. 2008. 『中学校学習指導要領解説 外国語編』. 開隆堂.
- 岡秀夫 編. 2013. 『グローバル時代の英語教育』. 成美堂.
- Rando, E. and D. Napoli. 1978. "Definites in *there* sentences." *Language* 54: 303-313.
- Ward, G. and B. Birner. 1995. "Definiteness and the English existential." *Language* 71: 722-742.
- . 1997. "Response to Abbott." *Language* 73: 109-112.
- Zandvoort, R. W. 1980[1962]. *A Handbook of English Grammar*. Maruzen Co.

資料

- 文部科学省検定教科書 2016 版 『New Horizon 1』, 『New Horizon 2』, 『New Horizon 3』. 東京書籍.
- 文部科学省検定教科書 2016 版 『Sunshine 1』, 『Sunshine 2』, 『Sunshine 3』. 開隆堂.